

農業技術センター普及指導部作物関係情報

タイトル： 麦の生育状況と赤かび病の注意点と麦凍霜害について

発信日：平成24年4月20日

1. 麦の生育状況について

(1) 気象状況

- ・気温は、11月は平年より高めに経過しましたが12月以降は低温が続いています。
- ・降水量は、播種時期の11月中・下旬が多めに経過しました。12月後半～1月前半は降水がありませんでしたが、2月下旬～3月上旬は平年より多くなりました。

(2) 生育状況

- ・12月以降続く低温のため生育は平年より遅れており、出穂期についても平年より遅くなると予想されます。
- ・大麦は、一部で湿害の影響見られましたが全般的に生育は順調です。今年産からオオムギ縮萎病抵抗性品種「さやかぜ」を導入したことにより、オオムギ縮萎病の発生は見られていません。
- ・小麦は、全般的に生育は順調ですが12月播種では生育が遅れています。また、一部地域において生育不良が見られており、麦類縮萎病の影響が疑われています。

2. 麦の赤かび病について

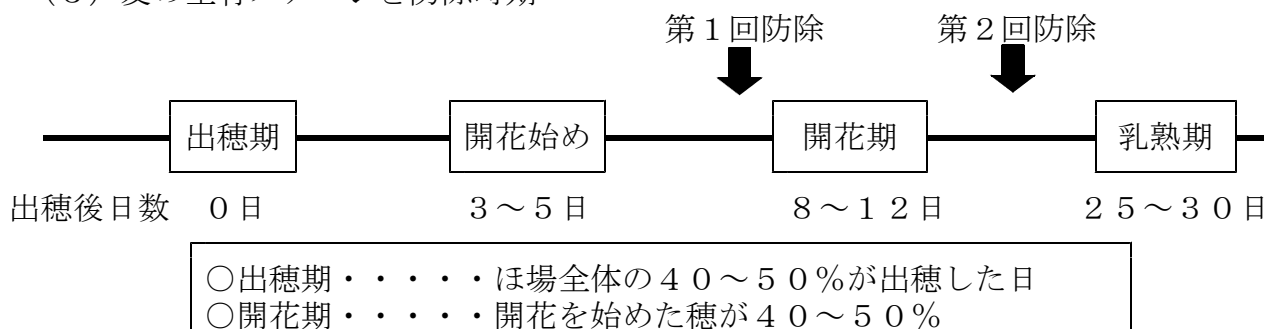
(1) 赤かび病の発生しやすい条件

- ・出穂期以降の気温が高く、降雨が続くなど湿った条件で感染しやすくなります。
- ・多発生の際は、出穂期以降の気温が18～20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合や、降雨・濃霧による日照不足が続く条件です。
- ・最も感染しやすい時期は、開花期から10日間です。
(大麦では4月中・下旬、小麦では4月下旬～5月上旬に当たります)。
- ・病原菌(カビ)は、前年のわらや刈り株に付いており、湿潤条件下で胞子を飛散し(早い年では3月中旬頃から飛散する)発病の原因になります。

(2) 赤かび病への対応

- ①赤かび病は、病原菌が毒素(デオキシニバレノール：略称DON、ニバレノール：略称NIIV)を生成します。農産物検査規格では、赤かび病被害粒の許容値が0.0%と定められており、許容値を越えた場合は出荷停止になります。また、DONについては暫定基準値1.1ppmが定められており、分析値がこれを越えた場合も出荷停止になります。そのため、赤かび病の発生を防ぐため、トップジンM水和剤、ストロビーフロアブルなどにより防除します。
- ②農薬による防除をする場合は、開花始め～開花期及び開花期の1週間後、の2回散布すると効果が高くなります。(1回目と2回目の間は約7～10日間)
- ③薬剤散布によって発病程度は軽減された場合でも、カビ毒が出ることもあります。赤かび病の発生が多く見られた場合、カビ毒の生成を抑制するには開花期20日後(出穂期30日後頃)の追加防除が有効です。

(3) 麦の生育ステージと防除時期



3. 麦の凍霜害について

(1) 凍霜害の発生する条件と今年の状況

- ・ 麦が伸び始める「茎立ち期」以降に、地表面から3℃程度の気温が氷点下になると、幼穂に障害が出ます。最低気温が氷点下2度以下で被害が発生し、氷点下7度以下で被害が大きくなります。
- ・ 3月後半で氷点下になった日は、3月15、16、22、26、27日で、平年より多くなりました。
- ・ 11月中に播種した大麦・小麦に被害に危険性が高く、12月播き大麦・小麦にも被害の危険性があります。
- ・ 一般に、幼穂凍死被害が出ると、補償作用で退化粒の抑制や遅れ穂が多くなことにより、減収につながらないことが多いですが、粒の熟期幅が広がり、収穫適期の判断が難しくなり未熟粒の割合が増加し、外観品質が低下する傾向があります。

(2) 凍霜害への対応

- ①大麦は、4月上・中旬（11月中旬播種で出穂直前～出穂始め）に追肥（窒素成分で10a当たり2～3kgを基準）を行い、粒数の確保と登熟促進を図ります。
- ②小麦は、4月上旬（11月中旬播種で出穂25～15日前）に追肥（窒素成分で10a当たり2～3kgを基準）を行い、粒数の確保と登熟促進を図ります。

4. 収穫適期判定方法

- ①登熟日数：出穂後の日数
- ②麦の生育状況：穂の成熟・色の変化（黄熟）程度、茎葉の枯れ上がり程度

表 麦の出穂期・成熟期平年値
(神奈川県農業技術センター：平塚市上吉沢畑圃場：11月15日播種)

麦種	品種名	平年出穂期	平年成熟期	登熟日数	成熟期の麦生育状況
大麦	さやかぜ	4月16日	5月27日	41日	大方の穂が湾曲し、芒や穂の一部に緑色が残っているが、概ね穂が黄熟した状態
	(カシマムギ)	(4月11日)	(5月24日)	(43日)	
小麦	農林61号	4月22日	6月9日	48日	止め葉の一部を残し茎葉がほぼ枯れ上がり、概ね穂が黄熟した状態